
5ive Stars Children

佐藤つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Five Stars Children

【Nコード】

N9369X

【作者名】

佐藤つかさ

【あらすじ】

目覚めてみると、そこは異世界だった。メンバーは月から来た軍人。勇者の信託を受けた少年。科学捜査を専門とする刑事。異形なもののや竜と戦う少女。歌姫を夢見るガンナー。元いた世界も人種もてんでバラバラな彼らが、遺跡や高層ビルを駆け回りながら敵と戦い、元の世界に戻るべく協力し合う！ タチバナナツメさん、加藤ほろさん、トキさん、藍村霞輔さんの協力をえて開始したオールスターバトル。ここに開幕！

0 - 1 (前書き)

当作品は、作者様の許可を頂いて執筆しております。

なお作品の性質上、各作品の物語やキャラクターをより深く知っていると楽しめるようになっていきます。もちろん読んでいなくても楽しめるようになっていきますが、内容を知っているほうがより面白おかしく読み進めることが出来るので拝読をお勧めいたします。

それでは、ようこそいらっしやいませ。水色の夢へ

暑い。

今いる場所の第一印象がそれだった。

革靴で踏みつけた土は固く、木々はまばらでどれもやせ細っていて、雑草も満足に生えていない。灼^やけつく太陽熱のせいで水分が軒なみ吸い取られているせいだ。遠い地平線はゆらめく陽炎^{かげろう}でよく見えない。

アフリカのサバンナを思わせる荒野。いつ砂漠になっておかしくはないだろう。

雲ひとつない晴天の青。大地はくすんだ土色と、かすかな緑。

そして黒。

黒。黒。黒。

革靴の黒。スーツの黒。髪の毛の黒。

まさにつま先からてっぺんまで黒づくめの男の名は、井上陽奈^{いのうえ ひな}。

科学と正義を信じ、犯罪を許さぬ刑事である。

「……………」

遠い宇宙から射られる紫外線を防ぐために、端正な顔をサンングラスで隠す。

肌を刺す日差し。真夏特有のホットな視線だ。

しかし日本の夏のような『粘っこい』湿気はない。むしろ爽快だと言ってもいいだろう。

陽奈の足元で、サソリがかさかさとした音を立てて進んでいる。

それ以外の音はない。あるとすれば、時たま囁^{ささや}いてくる風の声くらいだ。

ここはどこだ、と陽奈は思う。

ここは日本ではない。

だけど外国でもない。

さらに言うなら 地球ですらない。

だってほら

「……………?」

何かを感じ取ったかのように、陽奈は横を振り向く。

そこにいたのは、さっきまで陽奈の近くを歩いていたサソリと

そのサソリを包み込んでいる泥のような『何か』だった。

「……………?!?」

突然姿を現した未知の存在に、陽奈は『何か』から一步退く。

サソリは体の自由を失っているにもかかわらず、そこから抜け出さんと必死にもがいている。

だがやがて肉圧に押し潰されてぐちゃぐちゃに^{ひじ}拉げ、さらに硫酸に浸けられているかのように殻ごと溶かされ、^喰跡形もなく『喰われて』いった。

そうだ。この『何か』は喰ったのだ。こいつは 肉を^は食む。

それは肉塊のような異臭を放っていた。

それは^{カルニゼロ}アミーバのように蠢いていた。

そして ^{カルニゼロ}肉食獣のように陽奈を見つめていた。

ずりずりすると『何か』が陽奈に近づいてくる。
足どころか頭も胴体の境界線もない。だけどはっきりとした殺意
をもって。

そうだ。こいつは陽奈を喰おうとしている。

我を見よ。我を見る。

我こそはこの世あらゆる存在なり。この世と異なる存在なり。
この世に突出して馳せ参じる。
我は喰う。ゆえに我あり。

陽奈が一步下がる。『何か』が歩み寄る。

陽奈が一步下がる。『何か』が歩み寄る。

陽奈が一步下がる。『何か』が歩み寄る。

陽奈が一步下がる。『何か』が歩み寄る。

陽奈が 下がるのをやめる。

『何か』はなおも近づく。だけど陽奈はもう下がらない。

こついつとき 敵意を向けられたときの人間は、ある反応をす
る。

圧倒的恐怖による諦観^{あきらめ}。そして

『何か』と陽奈の目が重なり合う。『何か』に眼球という器官など
存在しなかったが、この一人と一匹は確かに真正面から向き合っ
ていた。

あえて『何か』に眼があると形容するならば、脂ぎった獣のような眼だと例えるだろう。

そして向き合っている陽奈の目は　この世の何者にも屈していない鋼鉄の光を放っていた。

敵意を向けられたときの人間は、ある反応をする。

徹底的な廃滅行為だ。

陽奈はトレードマークのロングコートを翻し、腰に提げた相棒を抜き放つ。

そのモーションは、さながら鴉が翼を広げた姿に似通っていることだろう。あるいは悪魔に。

右手に握られているのは、高品質ポリマーで練り上げられた最高品質のオートマチック拳銃。

鉛の死刑宣告を見舞うための　剣や槍にも勝る陽奈の武器だ。

右手でしっかりとグリップを握り、底部を左手で包みこんで、足場に力をこめる。敵を迎える砲台の完成だ。

目標は前方。『何か』に銃口を向けて、陽奈はつぶやく。

「悪いな」

一発。二発。三発。

弾丸に詰めこまれたニトログリセリンが火を噴き、未知の存在へとまっしぐらに飛びこんでいく。

怪物を殺す銀の弾丸は持っていないが、金色の45口径弾なら備蓄がある。

さあ、金属の顎で肉を食い千切れ！

『何か』が呻く。『何か』が吼える。

だけど怪物は崩れない。どうやら普通の生き物とは常識が違うらしい。

ならば、陽奈の決断は一つ。

さらに撃つ。

痛みに哭ないているということは、こいつが『どんなもので出来ている』にせよ、鉛弾が通じる相手だということだ。

ならば、撃ち続ければ活路は開ける。だからこじ開ける。

ダブルカーラム複列弾倉を交換して、新しい弾丸を装填そうてん。再び引き金を絞る。

狙いはどこでもいい。どうせ急所は分からない。とにかく撃て。諦めるな。

至近距離から弾丸を容赦なく撃ちこまれて、『何か』の肉体が掘られ抉られていく。

蜂の巣にされていく屈辱に耐えかねたのか『何か』が叫び、打ち震える。すると、うねる体のそこかしこから、触手のようなものが生えてきたではないか。

それは芽が茎になっていくかのようにみるみる伸びてきて、やがて陽奈にその手を伸ばさんと

する前に、一つ残らず陽奈の銃弾で撃ち抜かれる。

「このコートは高かったんでな。触られると困る」

太陽のように輝く閃光マズルフラッシュ。風に溶けて空で波打つ硝煙しょうえん。銃からこぼれ落ちていく空筒の薬きょうが、時々石に当たってちりんと澄んだ音色を奏でていった。

その音色が、『何か』の咆哮おたけびにまぎれて消える。

陽奈の視線が、『何か』の抉れた肉片の奥深くから覗く、虹色の宝石のようなものを捕まえた。正確には、宝石の原石を思わせるいびつな物体。

もしも銃の神様がいるとすれば、陽奈にこころこころ囁くだろう。

『あそこが狙い目だ。ベイビー』

陽奈は神様の言葉に従った。

銃弾を装填。^{フルオート}連射に切り替えて、全弾丸を一気にそこに叩きこむ。ダイナマイトが爆発したようなエネルギーが、一気に虹色の宝石めがけて炸裂した！

読みどおり急所だったのか、『何か』はこれまでにない唸り声をあげて暴れ狂う。まるで心臓に杭を打ち込まれたドラキュラのように。

そうだ。この宝石はまさにドラキュラの心臓。

だから打ちこめ。白木の杭を。

だから撃ちこめ。黄金の弾を。

宝石に亀裂が走り始める。一発一発が放たれるたびに、ひびが少しずつ染みこんでいく。

「……………」
もう一度陽奈は弾丸を装填する。

だけど相手も負けっぱなしではなかった。いや、最期の抵抗だったのかも知れない。

触手を 最後の一手を伸ばしてくる。

陽奈が銃を向けると、相手が触手を突き立てるのはほぼ同時だった。

銃と触手がすれ違う。まったく同じ速度で交差し、空気を切り裂く。己の意志を貫くために。

速度を緩めることなく突き進み、やがて互いの心臓めがけて

タン、と乾いた音が晴天に染み渡る。

陽奈の銃弾が、相手の宝石に喰いこんでいた。

『何か』の触手は槍のようにまっすぐ陽奈の心臓に伸びていて
だけど、その心臓がある左胸の手前までしか届かなかった。

「……………」

ガラスで出来た風船が割れたら、こんな音がするんだろうか。

きらびやかな極彩色の光を撒きながら、『何か』はゆっくりと眠りについていく。

その拍子に、伸ばしていた触手の先端が、かすかに陽奈のコートを引っかく。

それを見下ろしていた陽奈が、静かにつぶやいた。

「…………… やっと触れたな」

荒野に咲いたガラスの雪。

それは、あの泥のような『何か』から生まれたとは思えないくらいに儚く、そして美しかった。

あの戦闘のあとで見れば、なおさらに。

とても非常識でファンタジーで、だけど命を奪われるかもしれないというリスキーさが、現実感となつてのしかかる。

摩訶不思議なり。この世界。

再び静かになった荒野に一陣の風が舞う。まるで戦いの終わりを告げるかのように。

あるいは、何かの始まりのように。

改めて、陽奈は思う。

ここはどこだ。

0 - 1 (後書き)

【Freaks Film }フリークス・フィルム}】
登場キャラクター？1 井上陽奈^{いのうえひなな}

身長185センチメートル。年齢19歳 男(女の子みたいな名前
だかれつきとした男。)

高層ビルが立ち並ぶ、対モンスター都市【パリカンツァ】で働く刑事。

科学捜査セクションA・R・I・S・E・(アリス)所属で、科学捜査を専門とする。

元々は日本人で、いわゆる『異世界迷いこみ系』の主人公。

ただしハーレムは無いしチート設定も無いし、この手の主人公に多いツッコミキャラでも無い。

黒髪で黒スーツのまさに黒尽くめ。いついかなる時でも表情を崩さず、クールな振る舞いをするようになってしまい『てめーは朽木白哉かコノヤロー』と作者から内なるツッコミを見舞われる始末。「たぶん年齢詐称で実は30超えてるに違いない」ともっぱらの噂。

一応ファンタジーをベースにしているが魔法はほとんど登場しないため、陽奈の武器は基本的に拳銃である。

モデルはV10ウルトラコンパクト。

なお、バックアップガンも所持しているので合計二丁所持。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369x/>

5ive Stars Children

2011年10月26日03時05分発行